

しゅんれんうそう
春簾雨窓（頼 鴨居）

春は お自ら 往來して 人は 送迎す

愛憎 何事ぞ 陰晴を 惜しむ

花を 落すの 雨は 是れ 花を 催すの
はな おと あめ はな もよお あめ

一樣の 檜声 前後の 情
いちょうの えんせい ぜんごの じょう

春自往來人送迎 愛憎何事惜陰晴
落花雨是催花雨 一樣檐聲前後情

解説 簾外の春雨をながめ、のきばの雨だれの音を聞きながら、その感想を述べた詩。

語釈 ※愛憎||天気だと喜び、雨になるとにくむ。

※惜陰晴||花を落とす雨を残念に思つてにくむ。

※権声||軒に滴るあまだれの音。※前後情||花の咲く前と、咲いた後の気持。

通釈 春は自然にやつてきて、自然に去つてゆく。人はこの去來を送り迎えすれば良い訳であるが、中々にそうはゆかぬものようである。何も雨が降つたから花も台なしだと思い、晴れたから花が見られると、一々憎んだり喜んだりすることはないのである。花を散らす雨は、つまり花の咲くのをうながした雨、同じ雨なのである。同じこの雨だけの音も花の咲く前と咲いた後では聞く者に愛憎両様の気持ちを起させることである。